



里見八犬傳
五輯
六

イ管
600
249



南總里見八犬傳第五輯卷之六

東都 曲亭主人編次

第四十九回

陰鬼陽人肇て判然
節義貞操迭々苦諫を



カニ郎尺八ホホあひうけなく父猪平が甲夜の間に多々門立しを音音が拒て
容ざる。と。き。とも。俱う。あ。驚。き。頻。々。嘆。息。あ。り。く。音。音。も。今。さ。後。悔。の
額。を。撫。く。嗟。嘆。し。現。彼。人。の。心。操。義。不。仕。恥。を。あ。ら。わ。る。故。主。の。為。心。を
盡。せ。此。度。の。功。を。子。共。譲。り。く。舟。を。沈。め。戸。田。河。の。底。の。水。屑。あ。り。あ。らん。や。
然。と。も。あ。る。縁。が。亡。魂。の。門。立。目。ふ。を。情。由。と。い。は。る。あ。ひ。の。隨。々。罵。辱。あ。ら
う。な。れ。ば。心。と。葛。の。葉。の。う。ろ。ろ。あ。り。く。あ。迷。ふ。旅。宿。あ。ら。の。草。の。原。歸。ま。あ
あ。も。あ。き。ま。あ。冥。土。の。障。と。あ。り。あ。せ。ん。痛。あ。ら。と。密。音。あ。ら。え。う。う。あ。歎。け。バ

ひいてひとよ　むゆふ　うらちと
曳の單節の胸張れて後々々々影々も項背寒くあるあや或ハ驚た或ハ
歎く心の悼い　あや　うぐ　ひんよ　よ　やうれい
め、ありとさへほど目前ふえーなぞあて稽平さるの甲夜小強顔く拒れても恨み
けき　ひまろ　つぐ　あばい　い　よひ　つれか　こま　うらう
氣色もなく竊小告げたりありて来つゝ霎時容れぬとうち勸解あひ痛中
は阿姑さまの内あ方の和地あ折をりて母屋へ案内し進せぬとあひふければ
云々と其報て柴置小屋へ扶容れ潜し物あやまる暇もなく姉を迎えんとそ
と膝々々々あやまりて後もこれ彼小事の繁くと彼ををゆるえうづり花心小
かゝるゆりー今が夢欽幻欽世ふ人たとゞあや　ひとき　あーと　こち　おほれこと
さるの肩ふうち被あひる　袂包あたまでその折るうが受とりてあの置納の小戸
相へ竊小藏め措くり兒とも又夢の跡もあく大人共侶不滅朱欽今あやわらん歌
と怪しとあやども彼小此はあ疑人の罪あらうと要る兒所為で侍れども誘あま王が

つま。所夫よめだく事の蹟をん食り共立あぢやとゆひ軀身起
○夢もききやと。を尺八急は推禁やく何を物か狂ふ今柴小屋へゆけばとく又どが
う。大人のそるもの疑くもひとりゆけ誘引とも誰か立ん益かたりと
ふや。○ひとよ。さむが。あゝと。○ときふ。吟げば單節に有敷き争ひよく戸棚のうをえられ曳ぬいとのめと領きて
あつまあし。如右正々たるあづびひとり單節が疑もそのすかたあづび。柴小屋
おで邁んよう。まづ臂近ある戸棚を撈らばその二包の行袱の有や無やを知り
易う。ゆきえんをいと遽しく立んとほろを力二郎の呼禁めて頭をち掉り
あかぢやけ。噫大入氣中けんぶで無益の穿鑿するところ今彼迹を索ども後必考
あらん急ぐば歎たを倍せたとあらわけふ叱られて忘る。是も亦釋
うご。○ああんうんくくむく。○おとし。○ああね。ひをま。○ひとよ。おもて
ともどけぬ疑ひ尋思の頭を傾れば音音も眉根を顰めて單節が正しく行
つゝこのゆと。うけ。裏を被入より受あづくりといひいしく怪しなり。執念深れた人の七魂が行脚

法師は謹んで故郷へ像見を贈る。その物の本もいふに、これば世よかりとて誣りなり。然るを力二尺八寸あるの戸棚を開いてみれば禁裏あり。隠すものゝえまほしき死にそうなり。なれどもあわれどもかぎり。のう何うあらん吾侪が許さぬ。おれども共侶の開いて人誘ひとて軀之身を起せば曳き單節も後方より附く。戸棚の下に立あり。親父克んずも力二郎と尺八を吐嗟と云う。胸を貫く五更の鐘と共に八声の鶏の音も。鄰の埒遠けれど吹ちる風小どいれて殊更近く。暁々ありやう時を來つれと周章の兄。弟の目を指す心の中小別を告げて竊急ぐ起行の準備。笠を引きて死き脚絆を切み。結更で嘆息をものみ。知らば先立音音ハ棚の袋戸を開ても暗に彼此を撈れば果して當る二包をとり。單節よ是飲とさし示すを引かせく左見右見く。受とり。時鳥夜半。

包の色を定ふ不認め、何れなるものもその餘は悉くおぼえあり。この二包で宿るかと思へば音音の嗟嘆してぬゝこの世に死魂の齎せし物との事跡も迷ひ怪しき。
 中記りの限りは何れあるものの包をとりて披ぎ見えぬと云ふ單節へちなく
 結合せし包の端の堅さをやうやく解分れば鬼とも魑ても傳ふ二箇の包を共
 侶に披ぎたるがあらむ。顯れず男子の斬首変りし色も一雙の死相は駭く
 媳姑あつて齊一声立て退避する背のうしろ忽地空なる苦惱の両声燈と燃る鬼
 火の光を再驚く婦女輩こそ何事ぞと久々いふ今あて在る力二郎尺八丈小
 忽然と形は消えあつたり。奇異怪傀誰か瞭惑さる人死や力二郎よ
 天へと南より所天より伏せと三人齊一呼ぶせども答へ絶く空蟬の蛻の殻とみ
 留めしが胸淡れ心惑ふ是も夢歎とおど覚ぬ無明の醉ふ忙然たり。かくる
 惑ひの中や音音の咭と心にく二級の首を燈火のほとり近く引き寄せつら



顔のとうちも成られて口を挿く呆れてきつた。音音の油断せぬ半信半疑の膝を
 進めて瞬もせず、音平をうろく僅の領地をうろく趣きあれども胡越は等しき焼雪
 ぬ、今も忘るも憚りて吾侪を訪きて土産の二種の斬首のつらさを況んやが
 戸田河へ入水のうろ甲夜の間に犬川莊助とういふ旅浪人が竊みわたり報しと
 吾侪の巨細を竊みわたり然るをわたり恙なく武藏の盡きうろとあふまきふ
 つらさを疑ひの三つあり且ん刃が入水のうろ獨犬川が笑うのをきき力二郎八木
 當日の戦ひ云々と報めぬを告げ子共も真柴焼く朝の炊きかき
 煙のうろ滅失て今又わたり見えんといふ疑ひの三つありけり。かきもわたり変化
 なる、西個の子共とてをうろ抑亦何れぬ。あふめうろと詰問れて
 音平の首級をうろ縁故を詳しむる然る疑ひの理りあれども武藏
 より携きて甲夜の単節の遞与する二包はこれなり。この外は物なり納めを

索る。うろとての単節の訝しとあふ又舊の棚の袋戸推しけり。鬼も俱か脂
 燭して彼此隈を収獵どもそれ秋とて物あり。尚置処の違ふ秋とて夜具措く
 破戸棚をうろはるれば果とて物あり。祇の色異れどもその二包を結合せしこれ
 彼共ふく似る。單節はうろ両手をうろ棚より取つてこれなり。これなり。と
 指示せし音平うろとてそれなり。且く其処に措きうろといれり。單節は
 ありをうろ思議のうろをうろ甲夜は受とり一包が平くこれなり。包
 收置する戸棚はあふめをうろの間外をうろやうろ人加梅く。似たり。是は彼四箇の
 果物初の度よりうろその二包は何人がうろを隠し置る。これなり。怪しきなり。
 ちやといひ。傍をうろ音音鬼も果て寔に甲夜より曉るまであり。あふめ
 うろのうろみは是物の障礙を必油断せぬとてつらき怖氣を三人きき
 女子の智慧の浅瀬を流る遠漁人鬼と音平は疑ひのうろ釋きうろ。且て

やまへい。え ひびき あらう。おとしひ。 うづか。 めの つと。 まるやうあつ
 稽平ハあひ地うー膝うち鼓く音音はさめが疑ひをぞ物あるぬ包のみ推量の外なれ
 いもそのすねときりけられけふこの地へ来る折身長隆記一個の武士腰に両箇の包を着
 。あらわ そろき。またちゆ ひより ビーソー せいの つくつく付
 が白井のころ走り来て先立立つ邁くありけるこれより先不彼邊まで仇撃のりの趣
 そうせん みち きき。これんれ おどらせの とうせの さまうのちなり。あゝち と 勢多路
 その風声を送て雲を是彼ぞひあつた道節めあむをやとも心つたりくバ
 わどつけ。みうあ あだ。すぢ ひくれ。 あよそう ところあひ。さん
 おかつつも跡を追く足失はずとも程小既方今日暮るうかそ初更の左側小件の
 おしゅうげ につく ことち こしく せいこくくうぐ
 武士の杜蔭ある塚のほとり立ちあがりこそものと見られ樹隠れてその為体を窺ひよ
 そうけん とう さぎで おこし つき とうげ。つくとむけ おあ
 天結陰りと闇をも決定する穴見えろひと腰ある包を取ゆく塚は賄贈て祭ると
 おひ。まれ又情かりめう彼人の賄贈一物ハ雙言の首級狄どもあらずばもう推量は卒一
 どうどうせら よめ。ちり とん。 なり ひより ふせいのつつう うげ
 うぞ道節ぬふをあく近づく問答をともみけり一個の癖者塚の蔭より
 あひハいぞ。さんつきと おひ。とう おひさあせり来りゆうきやなど。ま
 頭れ多く件の包を取んとけああこの武士の取せどと挑争力力量早技優さむ
 をと ちよんちや。みて そぶー ききやうく。 と死 うの ひより かや。きざあ
 劣らば如法夜に乱れぬ巻の奇々妙々なることを時を殺しあひ一箇ハ必しも付けらん。

且雙方を推鎮せしその名を問ふと老後の腕立走菟りくこの杖を二人が向へかう突
き合ひておのづから
互に推分んとせしと云ふ肩より掛る両箇の包をあらむ撲地と落し慌忙に彼此と
うぐやあてとわどおのづからのぬきひらめきさるるせれいさきりけり
撥撈當り取る程小彼癡者が抜閃る刀尖狂々石塔を所削りける石火の光り小件の
ぶーやうつそ。ひさびさ。まあく。よう。
武士も両箇の包を引提ぎ直躬と立ちと見えたる形の消く往方を知れば是れん火道の
御あるべし奇術を獲たり人い道節ぬありなり誰う亦あくあふ至らんその名を
問ふと問ふれども必彼明あるべしといひ決ち慕ふ必要時もあるべし又舊の野路をこ
ろへ走るふらん癡者も亦茂林あり頻りにこれを追ふれども及ざらんあままでい
續たてもなだかりつけし。かくこれのあまよくあの門邊に立ると此單節が竊小
あられ。○あいにや。いてい。わど。せうゆ。○あふおげぢ。つて。○正。あふおれのきき
憐しく柴小屋へとぞ憩せうか。程小莊役が白井の下知を傳へる絆の趣洩安
そく心ふかれば尻もあふぬを竊ふ其処を立ち出で或は背門より庭面より間なく母屋小
あふをうつけし小渠より先ふちつたてゝあふ基のある人ありその二人は道節ぬ小彼癡者

○いづつとも○ぬきまゝのものをかぐさう
ふひへ大塚が友犬川莊助舊名額藏といひその物記をの値遇ゆりく不意白井の
仇敵路次の窮阮も大塚は諍誣する密書のもろ届ぬやあて送もなく編むてわ
驚起ち勢ひから便宜は多く獲るこくと見参入のふとせし物うあるまふ舊婦お
ちう罵られ不似のるををえんと恥うかくて黙さう若是て又道節ぬへ大塚おそ
索へと犬川共侶遠けは外面はびひるこの間中を子共の人を音音をたふ
報んと幾遍とか縁頼へ足踏うけても面おせてもぬかうさぬみ程小兩個の娘
婦お相侶れてまるハカニと尺八ありと浅おくうれりねあるもの退却櫓下近
柴垣の蔭に立つ通宵念仏の外世うかり死無事あるに香を焼くを事あるに
佛足を戴くとのみ世の常言ふ似るまふ罪ある今さう受ば彼茂林にてとがその
包を送せると死道節ぬは拾とけんどもあふべくこれの亦道節ぬの二色を搔撈取
りとく保お肩よりひいてあへ来て甲夜に單節す處とせしうも儻あふべれ彼の

置処の違ふにこれよりて猜ひふその二級の首を道節ぬけ懸けしに
敵小疑ひを以てたてし二包の真の祇をばて単衣の袖をてせりこれの証と
する不足れ地を打槌の外もこの言のまゝ必當のんかても不疑なる三包を解
か然るに人子共の人も立地あるやわんどうくそよとをがくる言葉の
本末今さうふ音音の甲夜に竊聞し彼莊助と道節が問答をえひ合はる
僅ふこの條を疑ひの稍解ども解ぬ包の氣はかる申も道節の燈火のやうに
両袂の結塊をたててはこれに音音も間近に膝を進めて披くをれば是も亦兩個
人の首これのやと呆れる三人齊に瞞を定めてぬきび右あり左ありえれば
カ三郎と尺八が首級をて色を變れおどくと今も在り面影の紛々たるわん
又胸洗れ心焦れて喃浅お此所夫よ伏よ子共をそと共産ふ歎け弥倍を愛惜の首
級を取て膝を乗し素れ髪を搔揚てる位でえどもい難る味疑の文の怪

死喪の如く涙の雨の袖を絞るもあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 頭を低く斑の齒を昨締るれうもあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 多ぬ人間に追れぬ現會者定離かうもあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 涙小更く泣然う當下音音のやうなう志氣を擧げて原來子共を慰め
 けを心やうあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 惜平が左右の膝を衝詰て世ふあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 なくかへり泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 浦島のあはれ玉匣よりあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 呼子く夏向の声も枯れぬあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 如く俯沈む媳婦と媳婦とあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 うあうと幾遍泣いんとあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め

これらのうへ問れども詳お告んとあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 媳婦達涙を禁めて泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 罪科を宥られどもあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 戸田河小投おけれどもあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 うへ流されて東の岸は著くあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 勸は助る神の恨く濡るあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 滅びぬとありあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 滅兵と刺ちぬるあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 共の先途をんまぬあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 此の俯横する死骸ありあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め
 迹を索く透もなくあはれ泣きぬる憂の漏れぬ惜平の慰め

定うけだ。この故を捨果し命を要時存在く。子共の存亡を定めて
後かともか。おとどひふその曉に神宮ある宿所より走りぬ。心竊に準備と
姿を変え次の日は大塚へ赴き街談僞説を拂向ひ。戸田河原の戦ひ陣番丁田
町進ハカ二郎は撃たれ。これぞ隊の兵を東の岸に踏留り。尺八と戦ハカ二郎が援
来。胞兄弟力を勦く。奮戦突戦瞬間は雑兵夥刺伏せ。頻に克は衆の。の
町進が属役ハ仁田山晋五と呼ぶ。その四五十名の隊兵を。大塚より援軍の連放する
鳥銃ハカ二郎ハ尺八ハ交所の砲瘡竟は堪む。間近に敵と引組。刺ち入て伏る
け。か。属役ハ仁田山晋五ハカ二郎ハ首捕て大塚へ既陣。その功は誇らんとく。
カ二郎ハ首級を。大塚信乃と偽り唱へ尺八ハ首級を。小所願藏と偽り唱へ。
け。中も庚申塚の邊に棟樹の下に泉あり。と緋人ロは隠れ。これぞ子共を
先。死後れる。花が身の方。な。鬱憤は腸を断。歎け。獨つ。め。う。

梟首せ。子共が。悔む。甲斐ある。ね。佞人ハ偽名け。大塚ハ川
西豪傑の恥を雪ぐ。云云。と。方。あ。もの。人々も報ん。と。只管。人。要時
あ。世。の。目。を。消。も。一。日。秋。され。更。園。人。定。り。庚。申。塚。へ。赴。た。心。當。る。棟。樹。の
下。へ。潜。び。近。つ。辛。く。取。り。せ。子。共。の。首。を。豫。て。准。備。の。行。祇。推。包。を。引。提。て。走。る。
あ。い。く。む。近。邊。の。夜。を。衛。る。兩。個。の。獄。卒。棒。杖。追。蒐。来。て。癖。者。等。と。呼。制。り。
緋。既。小。急。な。れ。兩。箇。の。色。を。秋。草。の。中。に。隠。し。些。微。議。せ。返。し。あ。せ。引。つ。け。て。晁
星。と。接。る。朴。刀。ハ。花。の。巻。を。あ。え。の。業。物。先。に。進。み。獄。卒。を。ば。く。ず。ん。と。砍。伏。せ。く。
之。を。刀。ハ。一。卒。の。棒。も。共。は。首。を。撃。落。し。け。入。り。二。の。大。刀。ハ。左。の。肩。を
乳。の。下。で。乾。竹。削。み。血。け。り。立。る。刀。の。牙。は。叫。び。も。あ。を。身。を。轉。し。て。仆。さ。う。これ。な
聊。慰。め。る。も。あ。く。鮮。血。を。拭。ひ。納。め。朴。刀。も。く。叢。を。と。け。包。を。取。り。又。携。り。
戸。田。河。を。歩。涉。し。て。三。四。日。と。夜。を。日。は。續。く。この。地。は。あ。る。一。切。が。身。の。為。な。件。の

夏の趣を由縁のもの迷まひ力二郎尺八が忠死義歿を誰か傳へん音音八年
 来中絶しを再會快う後にも渠が成てその人か法を踰るこれ人情美を
 進む公道あり故主の爲も子共の爲も両方う已べくむとあやうう阿容を
 この隠宅は素直の既往を云と報復の爲に罵られ拒れても怨懣を
 あふ一宵をぬ柴の小屋は想ふ外か故主のうと子共亡魂竊々又願
 良歡交腸も袖も離る感涙を絞るあまふ不思議の一條力二郎尺八死
 五日のあられも靈いこの王を去らば在る面影もさげふ且くあは願
 母と妻とを慰むの嗚呼孝ある義あるもの折られ外は立く彼晤譚を
 笑の障子の透り透りと見え勝ねが呼くわが圓坐は入るやと
 うその頭を携ふるそれは逢は消え失人と躊躇ひ生を隔の紙一重佛を
 憑む唱名も音もを字の終夜涙は暇ある魂を誰促はあなとも八の鶏の

鳴るを驚まれ冥ま陰火の光り鮮々と窓より望むられひり振るる
 ね今あやめ身達ありハハハハ胸の苦なり口説立く告れば
 音音も媳婦同胞も哽かへり泣く泣く外はあま哀悼悲愁のそ中
 音音の僅はあひえせ頭を擡て喃曳は單節もこの歎けあま妻子の涙
 人の勇みかると昔ういふ実更然もあは後世に人の大うかれ九貴は賤
 武弁の家は仕へる命を豫めかためのとあひあは人か捷れ忠も義もあ
 主の先途あなれども教を守り義は父の愛を友を薦んるその日の敵も外
 かの亦是讐の麾下の武士大石兵衛が陣番を撃捕するのを犬塚大川西雄の
 身かりふせれ死して栄ある子共武功この人やは父の父なり子も子あり
 叔も面も積平との恩は負ふ誠心の子共功を譲らんと捨命の盡せぬ
 神の祐飲佛力飲るは力二尺八が孝心其処は船とあり筏とあり早河の親の

必死ひつゝの代りけんともあつた疎うとる吾侪われらが愚痴ひがめと僻見ひがめする世ふた子共こどもどもを怪あやまで
 存在あやする父ちちを鬼おにと変化へんけと疑うたがひするの愚おろき許ゆるさずと白地しろは勸解くんげつ
 泣なく共侶ともは鬼おにの軍節ぐんせつも泣腫なみづも二重ふたえ瞼まなこは八重やち雲くものかる憂うれひへ世間よのあやは儚はな平ひらる再會さいかい
 別離べつり稚枝ちえの花はなの年としを歴へく共白ともしろ髪かみある雪ゆきの松達まつたけの心こころわ解とける本意ほんいある對面たいめん成なり
 側わきありて歡よろこむあつた只ただ哀かなれを俺おれ們らが短みづか姉妹せいて伏ふの縁ゆかりへ別わかれて後のちはきのふ
 まで雁かりの翼つばさも絶果つた果はる音耗おとせぬあま月つきのけふ七日なな日の曉あけも名なのこりけをいつあれば
 年としも下くだふ牛嶽うし二星ふたほしのあふ瀬せへあふ七なな若わか者の影かげも苗なえやは逝水せすいのえぬ旅りょの衣えも
 然しかり合あひて冥土めいどまで伴ともひはせつれぬ長なが妃き嘆なげきを送おくされその身みは今いまも
 措はかり憂うれふたを勝かちつも萎おそむ朝良あさの果敢はかり露つゆの玉たまの緒いとのこる絶つた目めも
 月つきも照あらぬものをめく秋何あきなん樂がく存命そんめい人骸じんがいはまはるとも心こころ変かはらぬあつた
 後の世のちのよも憑よりかたれ死しぬと惜平せへいが左右さうあり腕うでを伸のばす朴刀はくとうを

取とりも果はる撥遣はくせんれが音音おんおんも俱ともに推禁おしめく狂くるをや鎮しづめる當あたり惜平せへい声こゑ
 予より立たつ理ことりたれども媳よめ達事たちごとの始終しじうをえく心こころ死しんと早はやに浅あき女子こしもありの
 惑まよひへ力ちから二即尺八にそくしちはち中なかつを虚うつろふ日本魂にっぽんたまの人ひとは捷はやれぬ死しの後の主ぬしを
 親おやを慕もふ姿すがたをえん然しかりてその妻つまの命いのちをえ断きんとくいつく靈たまを
 頭あたまも死したれぬのすをえん天てんを恨うらみ世よを憤いり生なまを輕かろく死しを樂がむ只是ただ愚おろ
 疾あやの患うれをく良人よしみの本意ほんいは悖へいりて死して何なんの益えきあるま戸田河とくだ河が投なげ
 趣おもむき意い異い日ひを同おなじて語かたる今いまつらと案あんするふかぬる子共こどもどもの首くび
 級きの道節みちせつは携かかられ又彼またの討捕うちとひ仇あやの首級くびきをさかぬる主ぬし從忠信じゆうちうじん
 孝義かうぎの感應くあんある庸事ようじとあつた況いは死生しせいの命いのちあり數かずあり良人よしみは代かりて姑ははは
 仕つかへて且かつその菩提ぼだいを吊たるそれを真まの真女まんななれかとも聴きぬわつたと解と解とす
 諫かんむと受うけ單節だんせつへ大々たいたいとぬ理ことりふ切きられてかえりも泣な顔がほをぬく檣さかぬる

いふに二郎天八が池家より落す事ありと云ふ。家も脱藏中を戸田河原の戦ひ
 たり。膚は著て終に陣歿せり。然るを彼も世に死後これを妻子小遣
 せし。今より良人より立代りて忠孝を命を保てといふ料をわんぐんが
 浮世に存在する良人の首を葬る日ある。七骸をも瘞めんと是をありと朴刀で
 見りと被る取直りて腹を切んとする程に吐嗟と云ふ音音より曳の單節に
 あり。身も投りけり。喃と叫び泣く。携る巻もあらず。涙は声
 あり。立ちて物体なり。俺們を今も諭し。いぬる道理は惺惺と云ふ相承
 あり。刃物三昧自殺の覚期へいふ。あひとあり。あひと。舞ひて。姉妹が
 力を勸し。辛うて取鎮めんと刀尖を建置。縫置をせ。喘々諫れ。猪平頭を
 うち掉す。あけ放さぬ。怪我をなす。何と云ふ。いぬる二日。戸田河原に
 死すべし。せ。い。あ。も。存在する。子共のあり。年来故主へ下。い。も。を。勸

解。い。亦是恩義の爲め。疎遠へつ。不実。わ。だ。か。り。程。小。主。家。の
 滅亡。子共。訪。し。大。義。は。加。り。この。時。中。を。身。を。殺。して。彼。舊。恩。小。答。ん。と。あ。ひ。め。せ
 今。さ。う。小。餘。命。を。あ。る。食。べ。死。年。老。力。衰。へ。故。主。の。先。途。を。な。す。や。あ。り。死。死。を
 義。士。の。素。懐。あ。る。哀。れ。死。を。樂。む。女。子。共。と。一。列。に。あ。る。あ。る。其。死。退。げ。や
 と。數。回。疾。視。嘆。息。を。推。居。る。曳。の。單。節。は。せん。と。あ。る。あ。る。と。叫。び。て。い。ぬ。る。い。ぬ。る
 音。音。に。あ。る。衝。と。寄。せ。て。意。情。剛。一。猪。平。頭。に。殉。死。し。その。身。の。本。意。あり。と。帰。参。の
 免許。を。受。け。て。この。宿。所。で。自。殺。せ。法。度。を。犯。て。故。主。を。侮。る。罪。を。亦。復。す。よ
 累。ん。加。稱。莊。役。が。御。傳。へ。雙。言。敵。の。下。知。状。い。れ。る。あ。る。あ。る。を。天。明。下。も。あ。る。還。り
 あり。和。子。の。い。と。心。の。ち。舊。恩。實。は。忘。れ。ぬ。數。れ。一。兩。個。の。子。共。は。代。り。と。故。主。の
 願。は。立。影。は。添。ひ。死。ま。き。折。は。潔。く。死。ん。と。あ。ひ。め。せ。ぬ。不。覺。あり。と。寤。れ。猪。平
 莞。尔。と。う。ち。笑。う。寢。ま。は。れ。る。い。れ。る。あ。る。あ。る。を。私。小。再。會。せ。ぬ。あ。る。あ。る。を。あ

死の死の尸田の履嫌疑を後送と和子共見参憚りあり。大塚の往
 方を索と云と子共のうも宿志を報ても又かゝり鳴呼ありと領を
 せしむる死を止れが鬼の單節の携りける巻を放ちて共侶は辭を添へ慰を稽平
 のく諾ひて刃を輕に納め告別して外面へ出んと縁頼の障子を破と踢り
 並立する三箇の癖者真額鉢赤索袈各身輕の打扮は是則別人の昨々来り
 莊役根五平六顯介を左右に持て意氣揚々る声高き小泣胸が涙を飲か
 べと昨々より猜れどもけり氣の宿所へ還る面色しく裏を垣根の間荒な
 背門より潛近つて簀子の下は終夜一五十をみるや音音の稽平亦
 是煉馬の残黨ある道節が餘類あり食縛りて白井へ牽ん腕を回せと呼て腰に著
 る黒繩をもち取りて投るが如く仇糾繫扱く張肘の車は逆さ端の斧突立
 なる六顯介も行材めせし声令と根鉢も技を縁頼を突鳴りて聞たり。

第五十四回

白頭の情人合色を遂ぐ
 青年の媚婦菩提ふ入

音音のあひくけも敵の間者は裏を被るく陳ぶくもあふれば鬼の單節を
 後方は添へて寄つて研んと懐劍の鞘を握りて立んとするを稽平を
 推隔つても騷がむ踢踢る裳を引折る西三歩根五平亦進む向ひて冷笑ひ
 意物を里人ホが捕は三昧鴻許あふ敵は足るめあふねと獨死の
 所作を今も益の殺生も放はあふ驚言敵の半隻望の隨は死天三途の
 瀬踏をせんとは右に携りて朴刀を左に取て挾むる必死の勢ひ心なり
 とも老人あればとあひ悔る根五平擬議する氣色もあふ彼難仕せと敦圍は六顯介
 左右より合する斧を振揚る撃拘んと走り鬼を稽平閃を遣違へて後合
 する刃の電光左に流る右に柱る西三刀打中を先に進る六を膳斜に破と

熊夫とて きうふう
 根五平音 ねごへいおと
 等と擲捕 らうとく

根五平

ヤス平

丁六

く
助

英泉画

道節

音音

八大傳五車卷六

山月堂

斬る砍のまゝ苦と叫びも更び斧うの捨て外面へ逃んとし縁頬より落る軀は忽地は
 両箇より倒れける顚介これを見えりて駭迷く庖福のうへ走り避んとし程は
 音音が遠く逆撃の刃は額を劈れり叫苦とむり外面へ又引くを肩尖より背を
 ぬぐびんと砍られて痛ふの堪む幾歩放投る如く蹴走りて度より倒れ死てり
 根五平この光景を舌を巻け膽を飛して立足もあらず縁頬を踏外へ滾落る技
 せし腰を敲けし伸の慌忙に逃走るを稽平音音の信とえく血刀引提く共侶追
 撃勇とひる程は根五平の庭門を叩く頻り走りて人曳の單節の氣を胸に
 俱は焦燥ほどもあらず奥のうへへありて曳と被る声と齊へ出居の隔亮の間を
 打を銃銃の竈違ひ根五平の背を胸を撃たれる苦痛の一声空を咽く仰
 反付れて息絶けり多ひがけに助大刀は稽平音音の驚れあがり立駐るええれば
 曳の單節に立ありて諸をなぐる破隔亮を裏面より颯と推開く頭れなる大山

道節と悠々と頤めて諭を隔亮を曳ふは舊の如く小閑さうくも上坐小著
 一はこれいくとむり小音音のあづその血刀を拭ひ納りて遠く主のほろへあふ
 なん稽平のあふぬ貝は刃を納りてくは外は且外面は走りぬ根五平が死骸は立
 たる銃銃を採取りて頭を回して四下をうろたふ荒田の隙は埋井ありて究竟の処は
 一と多は軀の件死骸を引撮りて推落りて又立ちて丁六顚介が七骸を掖
 りて叫ぶおれ井の底へ落しふりこの時既ふ天へ明く秋の初風涼しは朝餌を
 求食る群雀の離色は降集る比のまぐは三箇の七骸を里人ふよんせどとく
 らもあふ隠せし音音はこれとふるは團扇を把く道節さうの扇ぎの合咲て
 昨夕さうせあひ隨は曉も還るせあひはつとあひ不樂く安うさう胸も稍
 今もあふあふなりとも昨夕のあふの怪しむのほのあふの疑ひは解れぬ
 とええ根五平小峠の機密を知りて二人ありて撃漏る枉津日の神の

よ。○ちきりやん。あんぎあつ。
俗はゆる乳兄弟中へ恩義へ敦るを喪ひ心の憂ひぞとぞろりとあふらん。
天飛ぶ鳥の両翼をもち落されぬもの似たり然とて歎くも甲斐なし所行に世は
焦たる力二郎尺八が親となり妻となり幸ひと歎かすひうさより虎死しと
皮をとれ人死して名を送せ老少壽夭を命にと悟れば誰死ざるべ死せば
百歳の上壽を保つも命終する枕方は残る妻子のかかりみいつ何時ともみえかを
わづらひそむおと娘怨念は諭と言葉の末は置く露秋平次健々と膝は落せず
感涙小顔を背けて嘆息に恩義は厚き主命を阿と感じ音音が響く鬼は
単節ハ辱ささ面蒼なるの両袖を各顔は推當く只潜然と泣きなりの中小稽平ハ
知ると迫不退なく縁頬のあやめる障子のとりこゝを又蛇頭を低て黙然と
○いんげん
道を道節うしろへをられ世四郎密で圓坐に入らざりけとくとどまぐ立れば
稽平ハ稍近づくあふ恭しく銃鏡を道節は返してあふ不肖の某愁は死

後れつやうに現見参入するを恥づくひ又況二十年來の節を打き之音音を
 訪ひハカニ郎尺八が戦歿の事の趣竊は妻子に報知して彼四太士の往方をも
 究めんとあひの介する昨夕圖らばも田文といふ森蔭ゆく君に撞見なり太川生を
 柱んとて違へる四箇の首級は舊縁の竭後かんとおもて送は知らざりしを子
 共の首級を其処ありて主君に携はれる亦是恩義の感応ありさればあや
 その夜より太川生との四太士に友垣を結せぬ死して悔あり子共が送忠をまづ
 遂てゆとりひに頻り感激の暇は誠を顯せば道節も亦感歎して豫てその名を
 子に勝る老人の志氣顛直今眼前は行状をいれはよく感あるを若かり
 時一旦の過失に誰の咎らん今あていしく羞むとうの舊恩絶く忘るてあく不韜よ
 子に相助けくまが為ふ心を盡せし忠の功莫大とわれが今これをよくむ記せし
 被一條を贖ふ餘ありあるとて父尊靈はあり代りなりと勘當を免ありふ

用心かん。精し。その潔白を感。う。この一條を。猪平が志を知る。の。か。む。を。過失。か。へ。り。く。神宮。よ。浮世。を。避。し。り。敢。又。他家。よ。仕。へ。バ。子。共。の。為。は。帰。来。を。乞。ふ。音。音。が。ぬ。ふ。妻。を。娶。り。て。事。の。あ。り。及。ぶ。を。り。賞。せ。る。天。意。は。違。ひ。ん。カ。二。郎。尺。八。が。鬼。魄。の。も。と。遠。く。去。ら。せ。る。後。立。上。り。を。これ。を。聴。け。二。十。年。来。離。別。の。父。母。を。い。ふ。ふ。合。せ。り。多。く。ぬ。ふ。此。汝。が。考。心。の。応。報。は。疑。ひ。や。恨。め。ぬ。汝。を。今。あ。で。席。は。侍。り。て。歡。ぶ。貞。を。ふ。ぬ。と。よ。と。西。箇。の。首。級。を。引。寄。せ。り。ち。覆。ふ。る。祇。を。半。ひ。た。く。つ。く。と。あ。苦。い。胸。の。こ。も。ひ。を。籠。し。壯。士。の。泣。ぬ。泣。く。小。あ。り。る。至。極。の。道。理。は。諭。され。猪。平。音。音。の。白。麻。の。有。無。の。回。答。は。口。隠。り。を。受。る。單。節。の。慰。め。り。と。名。を。の。選。を。良。人。の。自。迹。の。これ。も。紀。念。は。あり。お。た。と。あ。い。れ。ば。堪。が。ぬ。あ。ひ。の。歎。け。せ。り。道。節。を。勵。し。て。意。の。あ。ひ。に。か。く。あ。ま。り。ぬ。折。は。何。を。歎。ん。酒。も。あ。る。と。答。ふ。と。鬼。は。單。節。の。涙。を。禁。せ。

きのふ還らせぬ。ひ。あ。び。進。らせ。ぬ。と。あ。ひ。の。い。ま。げ。あ。る。貯。の。一。斗。を。り。も。侍。え。か。と。い。ふ。道。節。領。に。く。甚。佳。々。々。疾。孟。の。准。備。を。せ。ぬ。や。と。い。ふ。單。節。は。こ。あ。ぬ。地。は。火。を。折。焼。は。鬼。は。厄。福。は。赴。け。酒。壺。を。そ。ぐ。低。擧。げ。り。同。胞。酒。を。盪。く。折。敷。に。載。け。孟。の。縁。に。鉄。也。も。相。生。の。松。の。標。の。高。時。繪。昔。堅。地。の。老。夫。婦。を。知。此。を。壽。く。七。夫。達。の。情。願。遂。く。俺。們。あ。の。面。を。起。せ。主。恩。の。賜。あ。り。ぬ。び。こ。の。う。へ。あ。ぶ。し。と。祝。し。て。秘。中。鉦。子。の。酒。の。ま。わ。り。看。あ。れ。ば。鬼。は。單。節。を。外。に。求。め。ぬ。と。見。え。と。具。く。を。道。節。聴。く。と。外。に。求。る。看。あ。り。彼。究。竟。何。物。を。あ。れ。田。文。の。茂。林。より。猪。平。が。持。参。の。首。級。の。當。坐。の。納。聘。駄。一。三。宝。平。亦。を。看。あ。せ。ば。觸。體。孟。の。も。の。ま。あ。る。誰。う。珍。重。せ。ぬ。死。を。り。く。席。を。改。め。て。よ。と。り。か。く。音。音。猪。平。を。對。ひ。半。て。と。ん。が。う。つ。か。て。い。ふ。物。足。ら。ぬ。木。を。伐。る。と。の。を。斧。を。り。て。妻。を。娶。る。ゆ。え。媒。を。り。て。も。の。人。欲。得。と。え。り。る。隔。亮。の。あ。あ。と。お。

声立く。さうや雪のあつ髪もうとけくことのりある相生の松年ゆりては
 あひ生の松をめぐりけれと謠連つゝあつて齊一席は著くもの。是則別
 人あつた一の著座に犬塚信乃次は莊助現八小文吾皆平小うあつて思人
 傘急やくさうゆりる再會に枯る枝小開く花を挿頭をもちた歡びあれ
 きのふ白井の厄難を脱しそく走るう夜は不知案内の山路は迷くこの処へを
 立もぬる遠く適過うる幸あつて莊助が犬山あつとつと立ち追つ索あつ
 あひぬる人煙遠き山麓あつて世は憚の笑もあければ野火を焼く四下を照し犬山
 ぬる對面う送は意中をたけ盡く渴望の素懷を遂う。かくて食うたれ立て
 未明はあへ来られとも愁歎悲泣の折あつて驚さんへるが少く且く便宜を候ふ程小
 雨賢息の義死孝感彼不可思議の一奇事小宵淡れ肉動なく慷慨嗟歎
 堪うたれか。程小癖者亦が利慾の爲小機密を拂うく不覺おその死骸饋り

なるを患ふ不足のことも又寄る敵めあふんと且く後詰を心ゆく對面達
 いまおよ。ああぎ。今小及べり嗚呼義あるを孝あるが世有るに而賢息の只俺們を延さんとき
 其処小命を傾されい。ち歎くやもあふ。況離別の二親をひとません。と
 亡魂の二々あふ顯れ。い憐稀ある純孝へ今その遺志を果さん為俺們四名の
 この婚姻は永人さん。を樂へり便是カ二郎尺八の孝義は酬ふ寸志なり小
 かが許さふべし。と正首は辭齊一來意を告てその替席を提擲。い稽平羞る面色
 ゆく過世の業因ある故也。死をべり。と死むして子共を繋。い刺相応。かぬ
 合色。辞さふ方。故主の懇命。おのれ。う人。あき。のく。四柱の俊士英傑。永人とあり
 ぶん。い。分。過。る。僥倖。之。當。り。く。と。固。辞。を。道。節。推。禁。め。為。は。謝。義。を。述。
 答。れ。て。音。音。曳。の。單。節。亦。を。四。大。士。お。引。見。ま。れ。は。四。大。士。ハ。そ。の。不。幸。を。悼。て。懇。々。慰。め
 づ。カ。二。郎。尺。八。ハ。首。級。小。對。ひ。て。恩。を。謝。し。生。る。人。小。め。の。つ。ど。く。誠。心。言。下。小。願。と。く。會

和子の乗馬やとあひものあひねや昨夕子共の亡魂を又合鞍に乗せてあつたあひもの
子共の首を負して他郷へ遣ふとせよ時とて畜生あつても朽ちてあつて不便
と今をいひむを偶々諄言も忠義の外に他つた現憑の誠心と人食ひ
感へける中み惜平の道節の希望の婦女輩を下總へ遣ふれんあつて一某
子共は代りて君に従ひまゐり同様の諸君子の行芳苑をも乗負てん何処までも召されよ
かといふ道節あへてその究めざる益の談の譬に雲と水との如くこれより各袂を分
誰れ亦その往方を定められ既然大塚生と別後の身を相譚する今現在の六士の外は同
因同果の二大士あつてその智力をよめて招く由や各随意に武者修めしと廻國年を歴
やが遭むといふとあつたがこれ後者あつてをよめられ汝の音音共侶は行徳へ赴け
諭せ又四大士も辭を添へて禁めける惜平望を失ふて悵然として退却する道節も
とて世四郎さうと心を苦めるとこの三室平と駄一が首級をあつた捨てて連ね
て

のれと
脱去するといふは庭門は梟首せよとみ惜平勇を起し二級の首をとりてゆく
諸打戸の逆釘梁の串に並べ梟首せよと起行の準備をせよと整ひて道節
愀然と四大士をええと某今一條の讎悔あり家小僧へ秘書をよめて火道の術を
獲るうへに甚だ愀然なり此件の術は左道ゆて勇士の行へるものなり要領の難
臨して一身を免すの歌の克と絶え要なり尤恥べしとあつて目今その
書を燐々あつて左道の異法を断ん皆見えと懐より火道の秘書をとりてゆく
燃残る地炕の火中へ忽ち地獄と投捨する燐々として立のち火災と共捕まの兵の
程ゆる潜寄けん一隊九人許柴垣の陰樹粒の間より簇々と走りゆく御誕と
呼ぶゆゑ縁頼よりち登りて撰捕らんと競ひ蒐るをあらぬと五大士は立逆ひ
引受て修煉の天刀風瞬間は真額肩矢向敵當る仕て砍倒を技も刃も海内
儔稀ある勇士の働け孰れ人も漏るる死頭顱を並べ撃れけりさうとあれと去



編述

曲亭馬琴稿本



淨書

田中 正造

画工

柳川重信
齋英泉出像

校訂
劑劂

中村喜作
神田菴驥德

家傳神女湯

一包 ぬらん諸病ふすー第一産前産後ちのともふぬえ又うちみかす
 りちひふりちひて急へんをまゐの功あり又二日えひをさき 油どくを
 けせよのつゆのありぞー葉小百本の功のうわたりぬひだのゆふがなる

精製奇應丸

菜をゆきえうと茹ゆのかげんをまじり制方方をつまありあそびと世上の類
弟とおどろくむ奇功ぬ魚神の如くつひふりひあふんをのづくと知らん
大包二百粒餘入代貳朱 中包三十六粒入代壹五ト 小包十粒入代五ト

婦人づゑの妙菜

つねに産後を助けるに用ひて即功あり
 一包代六十四文
 半包代三十二文

熊膽黑丸子

加んをめてまこのおその功をよ
 一色代五分

製藥并弘所

江戸元飯田町中段下南側四方みを店の向
神田明神下山本町筋同明町東新道入口
瀧澤氏

取次所 江戸芝神明前 〇大惣表橋筋 〇物町南入 河内登太助

里見八犬傳第六輯全五冊

當未士月延遲滯るを以てヤハ

全初輯ヨリ第五輯迄廿五冊

先年よりこの節まで追々賣出し置たり

朝夷巡嶋記第五編全四冊

初編あり第四編および右の
第六編全六冊當未十二月より

越後雪譜

江戸著作堂主人著
北越鈴木牧之考訂
近刻

秘笈名方

神田 瀧澤興繼宗伯甫纂輯 多く經驗の
近刻

文政六癸未年

大坂書林
河内屋太助

江戸書林
馬喰町三丁目
若林清兵衛

筆福硯壽利市三倍

本所松阪町二丁目

平林庄五郎

筋違御門外神田平永町

春正月發販

山崎平八

